

人間教育としての外国語教育

Foreign Language Education as Human Education

趙麗華† 森豪††

ZHAO Li Hua Tsuyoshi MORI

Abstract This paper begins with the explanation of our private study experiences in China. When we studied Japanese, we helped each other to improve our language abilities. We examine our motives for studying Japanese and find the real purposes of studying foreign languages, to take broad views of people and the world and create culture. In the final part of this paper, we find our studying environment is called “supportive climate” and respecting each other is requisite for studying foreign languages.

1. はじめに

まず筆者の中国での個人的な日本語学習体験を述べることから、始めたい。筆者は1994年に長春の大学で日本語を勉強し始めた。日本語との出会いは高校生の頃で、日系企業に勤めている従姉によるものである。従姉の日本に関する話は、私の日本に対する興味を掻き立てた。日本語へ私を導いた要素は二つあった。一つは日系企業の存在である。そしてもう一つは日本語自体の魅力である。日本語の音は柔らかく、その響きがとてもよく感じられた。これらの誘因から、筆者は日本語を専攻することになった。筆者の日本語学習は、大学の日本語科に入ってからである。

大学での学習科目は、「精読」、「速読」、「文法」、「会話」、「視聴覚」、「通訳」、「翻訳」、「文学作品」、「日本事情」、「作文」などであった。日本人講師は普通は一人か二人であるが、私の大学には四人おり、教育設備として教室にBS放送やラジオ放送視聴装置やビデオテープやオーディオカセットテープ視聴装置があり、日本語書物コーナーがあって自由に利用できるようになっていたので、学習環境は整っている方だった。

日本語のクラスは1クラス18人程度で構成され、専用教室を使用した。その教室に先にあげた視聴覚機器が備えられていた。そこは、「中国の中の日本」であるという状況を作り出すように工夫されていた。そして学生も工夫し、協力しあった。そこででの日本語学習で、最も

筆者の能力向上に効果的で、深く印象に残り、さらには教育観の土台になったものがある。それは協力して学習するということである。

その日本語学習専用教室には、「日本語図書館」というべき日本語書物コーナーがあった。日本人からもらった資料とか自分が買った日本に関する本や辞書を読み終わったらそこに置いておき、他の人が自由に読めるようになっていた。それは一言で言えば、「情報共有」ということである。情報も形のあるものばかりでなく、形のないものまで共有できるようにクラスメート全員が努力していた。それを典型的に具体化したのが、クラスの発表会であった。毎日授業が始まる前に20分間発表会を行った。毎日二人ずつ、発表した。自分が身に付けた単語や慣用句、役に立つ表現などをクラスメートに教えるのである。クラス全員が発表者の学習成果を共有するのである。教えてもらえば、自分のものを教えようとする気になった。それによって互いの日本語能力が高まった。語学的能力ばかりでなく、まとまった話をする能力を高めることにもなった。そして双方の能力の高まりによって、日本語でまとまった話をする能力を得ることになっていった。

互いに協力する姿勢は、教室全体の環境を「中国の中の日本」にすることにも向けられ、教室の飾りも教室に流れている音声も日本語であり、学生たちはできるだけ日本語を使用して話すことにした。これらの協力的関係による「中国の中の日本」という環境は、学生たちの日本語能力の向上に非常に効果的であった。

以上のような日本語学習を筆者は経験したわけであるが、その学習経験について検討を試みながら、外国語

† 東南大学（南京市）

†† 愛知工業大学（豊田市）

学習に必要なものについて考察してゆくの、本稿の目的である。

2. 外国語学習の動機

1985年に行われた総合研究開発機構の『日本語教育および日本語普及活動の現状と課題』という実態報告書¹⁾によれば、海外の日本語学習者の学習動機は次のようなものである。

1. 日本語の教育・研究に携わるため
2. 日本研究を行うため
3. 自己の専攻分野の知識や情報を得るため
4. 日本の技術を習得するため
5. 現在の職務や職業上の必要性のため
6. 日系企業に就職するため
7. 自国における将来の日本語の必要性に備えて
8. 訪日の予定や希望があるため
9. 家族や親類に日本人や日系人がいるため
10. 自己の趣味に関連して(日本映画や音楽を楽しむ)
11. 中学・高校における勉学の一環として
12. 父祖の言葉として(日系人の場合)
13. その他、日本に対する興味や関心から

筆者の日本語学習の動機は、この分類の中から探せば、「13. その他、日本に対する興味や関心から」に相当する。日系企業に勤める従姉からの影響であったが、「日系企業に就職するため」ではなかった。友人にはこのような動機は多く見られたが、筆者はそうではなかった。筆者のもう一つの動機である「日本語自体の魅力」はこの一覧にはない。筆者は結局日本語教育を専門とするようになったが、それもこの動機に深く結び付き、その動機の必然的発展でもあると思っている。魅力ある日本語そのものを研究してみたいということである。

現在の筆者の日本語学習動機をこの一覧の中で見つければ、「1. 日本語の研究・教育に携わるため」であり、さらに「2. 日本研究を行うため」であり、「3. 自己の専攻分野の知識や情報を得るため」である。これらは、最初の学習動機としては高邁である。筆者は、「自分も日本語が喋れるならすてきな」と思ったことを覚えている。それは目的とはいえない、素朴な学習動機である。「日本研究を行うため」というのは、動機であり、明確な目的と言えるものである。

筆者には、最初から「日本語の魅力」という日本語そのものへの関心があったが、最初、日系企業に勤める人がよい給料を貰っていて、あんなに貰えるならいいなあ

という動機で日本語を学習し始め、「日系企業に就職するため」という動機、または目的になることはありうる。

そしてその目的で学習している間に、日本や日本語そのものへの関心が深まり、「日本研究を行うため」という動機・目的に変化することもありえる。それは、「日系企業への就職」という実用的目的からの逸脱であるといえよう。勿論、日系企業に就職しても、「日本研究」が必要となる場合があるが、それはその企業の利益のためということである。あくまでも実利的、実用的イメージが付きまとう。

筆者には、最初の素朴な学習動機として、「日本語の魅力」という日本語そのものへの関心があり、「日系企業への就職」という動機はなかったが、この外国語の文化や言語そのものへの関心と実利的、実用的関心というのは、外国語学習の重要な根本的問題である。外国の文化や言語への関心を「教養」といい、実利的、実用的関心を「役に立つ」と言い換えれば、それは日本の英語教育の抱える問題となるのである。

外山滋比古の『外国語を考える』は、この問題について考える「英語教師論」で始まっている。外山によれば、外国語教育は「社会の影響に敏感」で、社会に影響されやすい。外国語教育と国と国との関係を彼は次のように言う。

当該外国語を国語とする国と自国との関係は、(A) 相手国が先進的優位にあつて自国を凌駕している場合、(B) 相手国と自国とが対等の場合、(C) 相手国が自国より低い場合、の三つしかない。

ある外国語が学校教育の中で制度化されるのはこのうち(A)に限るとしてよい。現にわが国の外国語教育が発足したのはみんな(A)の段階においてであった。²⁾

日本に関して(A)の関係が明らかなのは、明治初年と第二次大戦後である。英語学習はそれだけで意義を認められ、実用中心ではあるが、「教養の語学」というのも認められた。(A)から(B)の段階に移行するにつれ、「教養の語学」への批判が高まる。実用語学教育の必要性が強調されるのである。会話能力という技術の洗練が求められる。(B)の段階に移行すると、実用でなく、文化や言語そのものへの関心に移行すべきだと思われるが、「発信型の英語」ということが言われ、日本の英語による紹介技術の洗練という面に眼が向けられる。相手国への関心がなくなるのである。

その最終的段階の(C)に至るとどうなるか。それはアメリカ合衆国の状態である。世界中どこでも英語が通

用する。外国語学習は必要でなくなる。外国語を学習する苦勞をしなくていいわけだから、願ってもない状態であろうが、実はそうではなくて、それは一つの危機であった。古い話になるが、ソ連が人工衛星スプートニクを打ち上げた時、ソ連にアメリカが先を越された理由の一つに、外国語教育の不足が指摘された。アメリカ人が外国語学習をしないために、創造力を失ったという指摘であった。異質なものととの出会いによる刺激は、外国語学習の利点の一つである。

先にあげた日本語学習の動機一覧は、英語教育者には興味深いものがある。日本の置かれている立場が逆転しているからである。日本は学ばれる立場にある。日本語学習者へのアンケートであるからあたりまえではあるが。日本人は、長い間学ぶ立場にいた。それが、逆転しているのである。外山の国と国との関係を応用すれば、中国と日本の立場は特に経済・技術関係では(A)の関係にある。それが中国人の日本語学習者の動機の「3. 自己の専攻分野の知識や情報を得るため」「4. 日本の技術を習得するため」「5. 現在の職務や職業上の必要性のため」「6. 日系企業に就職するため」「7. 自国における将来の日本語の必要性に備えて」に反映していると言える。

筆者の学んだ大学の教室では、聞き取りと話す能力の養成には力を入れていた。筆者も、たえず放送やビデオやカセットで日本語を聞き、日本人の教師の発音を真似し、同じように暗唱できるように練習した。日本の歌を聴き、真似をして歌い、日本のテレビドラマもよく見るようにした。日本人の観光客と出会えば、話しかけて会話の練習をした。読み、書く能力も当然大事であるが、聞く、話す能力は重要な能力だと思っていた。

筆者は、四技能すべてが実用的に重要だと思っている。すべてが語学学習だと思っている。日本の英語学習で中心であった、読む能力に頼るだけの学習が「教養の語学」というのであれば、その教養は偏った教養になるように思われる。日本文化は、テレビでもビデオでも表現されているのである。それらでは、日本語が音声や映像として入ってくるのである。しかも文化的内容は豊富である。活字印刷だけに文化が表現されているとは思わない。

筆者の学習経験では、「教養の語学」と「実用的語学」との区別はなく、四技能を高めるための「基礎語学」があったように思う。ただ一応の基礎語学力が着いた後の進路に相違が出てきた。筆者は、日本語自体に興味があり、日本語教育者・日本語研究者の道を選んだ。企業へ入ったり、観光ガイドになった友人たちもいる。その友人たちは、「実用的語学」を高め続けることになってゆくとする。日本語教育者・日本語研究者としての筆者は、

四技能を高めながら、日本語教育について研究し、日本語や日本文化についての研究を深めてゆくことになる。それは「教養の語学」の範疇に入ると思うが、その場合でも読むだけの能力ではなく四技能を高めてゆくのは当然のことだと思っている。

3. 外国語学習の目的

先にあげたアンケートが記載された縫部義憲の『日本語教育学入門』に於いて、外国語学習の目的が次のように整理されている。

A 社会的目的

- (1) 日本語でのコミュニケーション能力を発達させること
- (2) 現代の科学技術・研究・情報を収集するために、日本語が読めるようになること

B 語学的・文学的目的

- (1) 日本語の機能に対する理解および母語の機能に対する認識を深めること
- (2) 日本人の発想法・論理の展開の仕方と文体との関連性についての認識、自国民に対する認識を深めること

C 文化的目的

- (1) 日本人の思考様式を共感的に理解することによって、異文化を理解を増すこと
- (2) 国際理解を推進すること

D 教育的目的

- (1) 視野を広めること
- (2) 個性的で許容性のある人間になること
- (3) 自己像を改善すること

E 実利的目的

- (1) 進学や就職に役立つこと
- (2) 日本への旅行に役立つこと
- (3) 将来の必要性に備えること³⁾

上記の目的群は、先にあげた動機群に比べると、動機群が、動機がまだ強く意識化または概念化されておられないものから、意識化された目的までを含み、個々の人間に密着したニュアンスがあったのに対し、この目的群は意識化、概念化、客観化された目的になっている。筆者の場合、日本語に魅了されたという、動機の「誘因」にあたる部分が含まれていた。その日本語への興味は「日本語が喋れたらすてきだな」という感じから「日本語を喋りたい」に移り、「日本語を喋るため」となれば、明

確に目的化されている。上記の目的群は、動機群が整理されたものと言える。以下、目的群を個々に見てゆきたい。

A 社会的目的

- (1) 日本語でのコミュニケーション能力を発達させること
- (2) 現代の科学技術・研究・情報を収集するために、日本語が読めるようになること。

社会は個では成立せず、集団である。集団では、コミュニケーションが必要である。コミュニケーションは社会的活動である。集団を営む人間の基本的能力であり、コミュニケーション能力の発達はすべてに関わることである。「(1) 日本語でのコミュニケーション能力を発達させること」は、上記の目的群すべての目的の根底をなすものと考えられる。

「(2) 現代の科学技術・研究・情報を収集するために、日本語が読めるようになること」は、先の動機群にあった「自己の専攻分野の知識や情報を得るため」や「現在の職務や職業上の必要性のため」に関連している。「実利的目的」に入っていないのは、「実利的目的」が個人の実利に関係した目的を含んでいるからであろうと思われる。「実利」という言葉も広範な意味をもち、目的が果たされれば、なんらかの実利を得るわけだから「実利的目的」に入るとも言えるけれど、通常生活の営みに金銭的なものを含めて直接利益を得るものに「実利」という言葉をあてはめていると思われる。

この「A社会的目的(2)」と「E実利的目的」は、外山の「実用の語学」に入るが、「B語学的・文学的目的」「C文化的目的」「D教育的目的」は、「教養の語学」に入る。筆者は、基礎の段階では、「実用の語学」と「教養の語学」という二つのものがあるというよりも、四技能の養成をする「基礎の語学」があつて、能力の高まりに応じて言語・文化そのものへの研究に向かうのと企業等での実用を磨く方向があるということを示した。専門化してゆくのである。

しかし専門化してゆくとは言っても、「実利的目的」を果たすには、他の目的も付随していることに気づく。

「語学的・文学」目的は、動機群の「日本語の教育・研究に携わるため」と「日本研究を行うため」に関連している。それらを具体化したものである。しかし「教育的目的」は、動機群には含まれていない。

「視野を広めること」や「個性的で許容性のある人間になること」そして「自己像を改善すること」を動機として日本語を学びはじめることはまずないであろう。し

かしそれらは、付随的に体得されていくものであり、またそれらがなければ、本当には、他の目的は果たされないのである。

外山は、「(B) 相手国と自国とが対等の場合」の状態になった状況の外国語教育の方向として、「実用がどうのこうのと言ってる限り、語学は社会の一時的変化にたえず左右されなくてはならず、長期的には無用化することを覚悟しなくてはならない・・・外国語による異文化との接触効果に着目する文化のための語学の建設こそ、より実り多きものと考えられる」⁴⁾と「文化のための語学」を提唱し、次のように言う。

「文は人なり」ということばがあるが、これを「ことばは人なり」と解することもできるであろう。もしそうだとすれば、言語教育は人間全体の教育につながるはずである。外国語を学ぶことは母国語のほかにもう一つの言語を知るというだけではなくて、母国語だけでは得られない思考、感性をもった新しい人間の誕生を意味する……………

人間形成や文化の創造にかかわる言語は後段言語(metalanguage)である。これは手段ではなく、思考、発想形式そのものとしての言語である。これが新しい考え方をする原動力になる。日常の実用的言語が文化的にはおおむね不毛であるのと好対照である。……………

これまでも metalanguage の一部が教養のための語学で代表されて来たが、現在、教養ということばはあまりにも消極的だと考えられている。もっと積極的なつよい概念でなくては時流に乗った実用語学と対抗できない。そのためにも、文化創造、人間形成のための、新しい語学の哲学を構想する必要がある。⁵⁾

外山が唱えた「外国語による異文化との接触効果に着目する文化のための語学」と「人間形成や文化の創造にかかわる語学」は、上記の目的群の「語学的・文学的目的」そして「教育的目的」に具体化されている。それに付け加えるべきは、それらが「創造的」であるということである。そして重要なのは、それらが外山のいう「(B) 相手国と自国とが対等の場合」だけでなく、基本の段階でも必要であるということである。勿論、基礎の段階でそれらを論理的に概念的に説明するというのではなく、学習の基盤としてそれらが必要なのである。

4. 異文化との接触と人間形成

外山の唱えた二つの語学は、最近の日本の外国語教育

の目的とするところである。それは、過去の外国語教育のゆきついたところでもある。第二次世界大戦後、外国語教育の教育法としてオーラル・アプローチが有効であると C. Fries によって提唱され、ブームとなった。構造言語学を取り入れて体系化された教授法である。音声言語重視の考え方に基づくもので、音声体系や文法体系を習得するまでは、オーラル（口頭で）アプローチするのである。その具体的な教授法は、文型の反復練習である。反復練習により習慣的に言語を体得させ、自動的かつ無意識的に言語が使用できることを目指す。この教授法の背景にちらつくのは、戦中の ASTP である。ASTP とは、第二次大戦中アメリカが軍事戦略的な必要性から行った外国語の速成教育プログラム、Army Specialized Training Program のことである。選抜された学習者を短期間、小クラス編成で集中的に訓練した時に、この反復法を取り入れ、成功したと言われた。反復法の達成には、機械が有効であり、語学演習装置が開発された。それで最も貢献し、利用されたのがテープレコーダーであり、いわゆる LL と呼ばれる語学演習室である。1960年代ごろまで、このような教授法が主に採用されたが、はかばかしい成果は得られなかった。それは機械的であり、人間的ではないのである。それはいわば「冷たい語学」であった。

1960年代後半には、意味や思考を重視した認知心理学を理論基盤として認知記号学習理論が唱えられ、1970年ごろになると伝達能力を重視する社会言語学を基盤とする考え方が導入され、1970年代から1980年代にかけては、人間の行動の基盤にある感情を重視する人間性心理学が理論基盤とされるようになった。それはいわば「人間中心の語学」である。

人間は、「知情意」に代表される機能をもつ社会的存在である。人間がそれらの多様な側面をもつ存在であることを理解したうえで、外国語教育は考えられなければならない。そういう理解が、外国語教育の場に広がってきている。そして多様な側面をもった存在としての人間という理解は、出発点にしかすぎないことを知るべきである。外山は、「人間形成や文化の創造にかかわる語学」と言う。語学を通じて人間が形成されていく。単に外国語の習得だけではないのである。

そして「人間形成」のために有効な、外国語学習の必須の要素として、「異文化との接触」がある。縫部は次のように言う、

日本語教育の構成要素の中で、人にかかわるものは Who と Whom である。日本語教室において、教師という役割を負った人と生徒という役割をもった人、日

本人と外国人、外国人と外国人、要するに人と人とがぶつかり合う。ぶつかり合いは、異文化摩擦というあつれきを生み出す。ぶつかり合いは、異文化理解を深め、人間関係を形成する。人間関係の基本は（心理的）風土（Where）である。風土とは人と人の間のことである。本来、人と人の間にいるのが「人間」なのである。日本語教育の主人公は、日本語ではなくて、人間なのである。⁶⁾

外国語（日本語）教育というのは、基本的には外国語（日本語）を通じて行う教育という意味である。もっと厳密にいうと、外国語としての日本語（日本文化も含まれる）を教えることを通じて、人間を育てること、さらにいえば、外国語（日本語）の習得を通じて、自民族優越主義（ethnocentrism）や大国主義（chauvinism）、あるいは自民族劣等意識から脱却し、世界的な人間づくりをすることである。

日本語教育は単に日本語という言語を習得するだけではなく、それ以上の意義と価値をもっているものなのである。つまり、外国語教育の原点は、人間愛を育てることだといえる。外国の文化を学ぶことが、人間らしさを育てることに寄与するという事実にもっと光をあてるべきである。⁷⁾

ここに、外山のいう「人間形成にかかわる語学」、それも「異文化接触」を有効な手段としての「人間形成」をめざす語学が、述べられている。この語学が、さらに「文化創造にかかわる語学」に発展してゆかなければならない。

「人間形成」のための語学、さらには「文化創造」のための語学の土台になるのは、学ぶ環境である。最後に学ぶ環境について触れておきたい。

5. 人間教育としての外国語教育の環境

先に述べたように、筆者が学んだ大学の日本語教室は、教師も学生も学生同士も協力的関係にあり、それが互いの能力開発に役立った。その教室環境は、「支持的風土」（supportive climate）といわれるものである。教室環境を「教室風土」と呼ぶが、「風土」は人間と人間の間関係ばかりでなく、その土地に根ざした文化的基盤まで連想させる用語であり、人間を多面的にとらえて、全体的な人間教育という面から考えれば、「教室風土」は適切な用語である。教室風土には、二種類あり、「防衛的風土」（defensive climate）と「支持的風土」である。防衛的風土は、怖い教室である。端的な例が、厳しい教師が

いて生徒は絶えずびくびくして不安と恐怖に包まれている環境である。その恐怖と不安が生徒同士の間から生じる場合もある。批判、非難、叱責の環境である。それに対し、支持的風土は恐怖と不安のない環境である。どちらを選ぶかと言われれば、だれもが支持的風土を選ぶであろう。そこで、考えておくべきことがある。支持的風土は、ただ恐怖と不安がないという面だけでよいのか、ということである。恐怖と不安がない教室は、安易に流れ、緊張感のない、勉強しない教室にならないか、ということである。防衛的風土も、恐怖と不安にかられながら、緊張感の中で勉強し、効果があがる場合もある。もちろん、恐怖と不安にかられるばかりで、勉強どころではない場合もある。

教室の中心的存在である教師の性格やものの考え方により、様々な教室風土が生じる。防衛的風土と支持的風土のいずれにも欠けてはならないものはないのだろうか。「人間形成」の場としての教室風土であるならば、そこには互いに一人、一人、個性をもった、人格をもった人間がいる必要がある。最低条件として、互いを一人の人間として尊重しあうことが必要ではないだろうか。相互尊重、相互信頼である。

特に外国語の場合は、母国語と違って人生経験を経た後で学ぶ場合が殆どである。そのような場合に、幼児なみに扱ってはならないであろう。外国語学習に基本となる相互尊重、教える者と学ぶ者の相互尊重の姿を示す次のような例(2000年12月8日付中日新聞)がある。

東京足立区にある夜間中学の話である。足立区には、90カ国に及ぶ18000人の定住外国人がいる。在日朝鮮人の年配の女性や中国残留孤児の二世や日本人と結婚したタイやフィリピンの女性などが通っている教室の話である。平仮名の授業で、父、母の字を教えた時のことである。

五十代の女性が「先生、父はハの下にXだから簡単ね」と言い、「確かにおやじはバツテンだ。よくできてるわ」とみんなで大笑いしました。でも、母の字は「難しい。ハに丸ならいいのに」などと不満顔で六十代の女性が「点点が邪魔だから消すわよ」と言うので慌てました。

「点々はおっぱいだから駄目ですよ」と頼んだら、横にいた女性が「先生に悪いけど、点々はお母さんの涙に見える」と言われ、思わず一同うなずきました。それから一人ひとり母親の思い出話が始まり、私もつられて披露しました。

五十六十代の女性が平仮名を習っている。初歩の日本語であるが、彼女たちの人生についての経験知識は豊かである。このような人びとに対し、いかに語学的に初歩であろうと、児童並に扱っては授業が成立しない。この経験を寄稿した松崎運之助教諭は「夜間中学で学ぶ人は不器用でも、自分らしくつくり物でない人生を生きています。読み書きを学ぶのも、幸せになるためです。幸せになることを忘れ、受験勉強で知識量を競っている、心は育ちません」と言っている。目的が達成されれば、だれもが幸せになる。その目的には実利的な目的もある。ここで指摘された受験勉強の知識量の競争は、その目的すら忘れてしまう状態をいう。その教室風景は殺伐としたものになる。教諭は暗い夜道に見える学校を「ふるさとの家の明かりに見える」と感じる人もいと書いている。厳しく怒るのがいいのか、褒めるのがいいのかという議論の前に、人間として向き合う、相互に尊重しあうことができ、それぞれが自分の人生全体で互いに向き合っているように思える。そういう「支持的風土」ができあがっている。表面的に褒めたり、怒ったりすることよりも、互いを根本的にまず尊重し、認め合うことが大切であろう。ここに「風土」の基盤をおき、「人間形成の語学」さらには「文化創造の語学」を目指してゆくべきであると思われる。

6. おわりに

教育は人間と人間との間で行われるものである。それは単に観念的に考えられるべきものではなく、生身の人間同士の生きた関係でなければならない。筆者の教育研究も、生きたものにしたいと思っている。その意味でも、自身の学習・教育経験に根ざした研究が大切だと思う。今回、まず自身の中国での学習体験について考察することから始めたのも、そういう理由からである。

愛知工業大学での研究は、新たな視点を与えられる、得がたい経験であった。特に吉川幸雄教授の中国語の授業は厳しい授業で、授業を聴講させていただいている間に、その厳しさから教育効果も生まれることを知り、「支持的風土」のみを至上のものとしていた筆者には衝撃で、さらに考えを深めることにもなった。吉川先生には御礼申し上げたい。

筆者の日本語教育研究は始まったばかりであり、絶えず自分の授業を反省しながら、生きた授業と研究に励んでいきたいと思っている。

注

- 1) 縫部義憲：日本語教育学入門，59，創拓社、東京，1991.
- 2) 外山慈比古：外国語を考える，6，英語教育協議会，東京，1982.
- 3) 日本語教育学入門，58.
- 4) 外国語を考える，13-14.
- 5) 同書，14-17.
- 6) 日本語教育学入門，47.
- 7) 同書，48.

(受理 平成13年3月19日)